

(書評)

広戸 惇著

『方言語彙の研究』

鏡 味 明 克

副題「言語地理学と国語史との接点を求めて」が示すような、言語地図をもとに国語史研究をまとめた、六百頁余の大著である。著者は昭和三〇年から十年間をかけて、中国地方全域を調査し、五百項目四百箇所の実地踏査を終えて、昭和四〇年に「中国地方五県言語地図」を風間書房から刊行した。この地図集にも、文献調査をかなり加えた「解説」が付されているが、その後、この地図の解釈、特に国語史との関係の解明に沈潜し、膨大な文献資料に目を通し、方言分布と文献との照合考察を進めた結果を一冊にまとめたのが本書である。

方言の言語地理学的研究は、文献言語史を補完し、国語史を全日本語的に再構するものであると認識されて久しいが、その実際の達成は、現代語から研究に入る方言研究者にとつては、文献を扱い慣れない場合も多く、どちらかといえば、文献国語史研究者による語史研究に成果が出はじめている段階であった。たとえば前田富祺氏の最近のこれら大著である『国語語彙史研究』(昭和六〇年刊)に、「もぐら」「うろこ」「かかと」その他多くの語の史的研究があり、それ

ぞれ方言分布との照合が行われている。方言研究家の側からは、いくつかのすぐれた論考、たとえば柴田武氏の「言語地理学の方法と言語史の方法」(「ことばの研究」二(昭和四〇年)や「言語地理学の方法」(昭和四四年)で扱われた「ほくろ」「しもやけ」「花のかおり」の考察とか、最近この問題に取り組んだ成果を次々に発表している小林隆氏の「文献国語史と言語地理学の対照による語史構成の方法」(『国語論究』1(昭和六一年)ほかの多くの論考などがあるが、文献との接点を求める研究はまだ多くないといえよう。

そうした中で、自身の調査による言語地図を直接文献資料によってくわしく検証して分布解釈を行い、中国地方の国語史上の位置や地域的特性を多くの項目にわたって考察したものと、本書は比類のない画期的な成果である。しかも本書は、研究の経過としては『中国地方五県言語地図』の分布解釈と文献国語史とのつき合わせという形をとっているが、その考察にあたっては、視野を中国地方に限ることなく、中国地方から出発して全国の分布を『日本語地図』の分布や各地方言語資料との照合はもとより、文献中央語の継承地である現代京都市の自身による方言調査をも加えて考察しており、『中国地方五県言語地図』をかなめとしての、全国日本語語彙の、国語

史と方言分布との接点の研究となつてゐる。この研究成果によつて、文学博士の学位を著者は受けた。

二

次に本書の構成を見よう。本書のもとになつた論考の大部分は昭和五〇年以降の最近十年間に発表された、最新の研究であり、それらの論考を軸として、多くの書き下ろしや改稿を加えて、新たに一冊に構成されたものである。本書は十三章から成り、第一章は総論である。第二章以下に『中国地方五県言語地図』の具体的な項目の地図と文献をつき合わせた論考が展開するが、それは地図の番号順とか意味分類とかによつてではなく、各種の項目から引き出された法則性のテーマ別に章立てをして論を展開する形をとつてゐる。たとえば第二章「名称の転移」では、その現象の見られる類白、四十四雀、えなが、鶴鶴、紙魚、殻象虫、蝮姑の項目を論じてゐる。各章は次のような名称、配列である。

第一章 総論、第二章 名称の転移、第三章 名称の交替・意味の交替、第四章 音韻の交替、第五章 言語史に現れた名称の混同と方言の分布、第六章 新語の発生と命名の多様性、第七章 名称の多元的発生と一元的発生、第八章 文献語と方言分布、第九章 渡来植物名の分布と解釈、第十章 山陰地方の開音語と解釈、第十一章 音節語から多音節語へ、第十二章 アクセントを中心とした茸の方言分布と解釈、第十三章 出雲アクセント名詞二音節語の四類・五類の尾高型の成立と中舌母音の発生。

「以上の種々の項目について、文献語と方言分布との交渉を明らかにして方言語彙史を構成するのが本研究の主目的である。なお本

研究の終わりの章に「出雲アクセントの成立について」の私論（これが十三章である）も述べることにした。」と総論の末尾に記してゐる。巻末に、「言語地図」として、『中国地方五県言語地図』によつて作成した図を中心に六九枚を収める。なお目次のあとに、本書で扱われた内容の頁と地図の頁、地図番号を検索する「言語地図一覽表」が掲げられてゐる。巻末には「本書と関連のある既発表著書、論文」「本書に記載した協力者名」の表も掲げ、人名索引、文献索引、事項・語彙索引を付する。

三

では各章の主眼とするところや気付いた点などを章の順を追つてみてゆこう。第一章総論は一 言語地理学、二 日本における言語地理学、三 国語史と言語地理学、四 多元的発生と一元的発生、五 渡来植物名と言語地理学、六 周辺の分布と隣接の分布、という展開で、言語地理学的研究の日本における展開を要約し、方言分布と文献語との照合の手順、本書で扱う主な項目とそこから引き出される問題点の概観が述べられる。本章で「地図の解釈は直接調査し、作図した著者のなすべき責任」との立場が述べられ、文献資料との照合のむずかしさと重要性、文献語史と言語地理学の協力関係についての論が展開される。また、たとえば、「玉蜀黍」の方言分布を解釈するにあつては、関連する作物が「黍」↓「蜀黍」↓「玉蜀黍」の順に渡来したことを「文献によつて知らなければ一歩も論が進まない」ことがわかつたこと、「黍」「蜀黍」を関連項目として方言調査時に取り上げなかつたこと、そのためあとから通信調査に多大の手間を要したこと、などについての卒直な反省が述べられて

いる。これらの体験の披歴は今後の調査者、研究者に多大の恩恵を与えることであろう。

第二章「名称の転移」では、頬白、四十雀、えなが、鶴鴿が関連項目として述べられ、ホージロの語が中国地方に入ってきた時、もつと頬の白い「四十雀」にホージロの名称が移ったこと、シジューカラの語が「えなが」に移り、カラスズメに代つて古来の「四十雀」のシジューカラの名が、「鶴鴿」に移ったことを解釈する。同様に、紙魚、殻象虫、螻蛄の穴をあける虫相互間の名称の転移、こおろぎ、きりぎりす、いとど、はたおりの鳴き声を聞く虫の間の名称の転移を追う。それぞれ、くわしい文献による検証が示され、たとえば「こおろぎ」等の虫の検討に際しては古代文献以来の五十余の資料が引かれる。また、「中国地方五県言語地図」で、「紙魚」のツミが一個所はなれて出ている鳥取県の佐治村に関して、その村の全集落の検証通信調査の結果が加えられ、また、広島県東城町小奴可ほか六地点の年層調査による新古の確認がなされている。加藤和夫氏の若狭地方のコオロギの分布図も引用されている。

第三章「名称の交替・意味の交替」では、まず「かまきりの卵」について、語頭がジーからカラスへ、語尾がフグリ等から同系統のダンボー等へ、など二つの意味を背負つて語が交替する過程を追う。「鶴鴿」では、多くの方言形が各地の生活の中で自由な表現による名称の交替を示していることを、「恐ろしい・賢い」では、「語そのものは動かず、意味が交替する」型をオゾイの「恐ろしい」と「賢い」の意味をめぐつて論ずる。「馬鹿」では、ダラ系の「なまけ者」の意味が外周、馬鹿の意味が内周で新しいとの解釈が明快に示される。

「あめんぼ・みずすまし」では、両者の語形の混同や区別を論じ「蝸

牛」のマイマイ系と鼓虫（水澄し）のマイマイ系との同音衝突を考察する。なお、私の最近編集した『兵庫岡山県境言語地図』（昭和六一年）にも、第一・二図に「あめんぼ」「水すまし」の分布図を描いた。参照いただければ幸いである。

第四章は「音韻交替」で、「虎杖」のサイジ系の音変化を例として、外縁はそのまま内縁（中心部）が中に中にと変化を起こしていく「逆周圏論」を説明、また「みそさざい」では音韻交替が意味を踏まえて起こることを追跡する。「めだか」では中国地方の分布の主流がメプトから発していることを音変化の系統をたぐつて明確にした。

第五章の「言語史に現れた名称の混用と方言分布」では、「とかげ」「かなへび」「やもり」「いもり」の名称の混同の歴史をくわしい文献資料により検証する。「語史一覽表」に挙げられた文献の総数は、表一、表二をあわせて九〇点の多数に上っている。

第六章の「新語の発生と命名の多様性」ここでは、「土筆」の例を、方言量が多いが、文献語（京都）に古くから変化がなく、一貫して基本形ツクツクシを保ちつつ、各地で新変化がおこつたという型としてとらえている。そして、「蛭蟻」のツクツクボーシとの同音牽引からホーシが生まれ、さらにヒガンボースができたことを見る。「ひたき鳥」ではヒタキ（火焼）からヒトボシ（火灯し）への連想変化を、「嫁の家出」では中国地方特有のホポロフルからウルに転化する過程でさまざまの連想が生まれることを、くわしい採集例から描き出した。

第七章「名称の多元的発生と一元的発生」では、遠隔の地に同一

のものが発生する多元的発生と、前章の「土筆」のような、一元的発生のものとの考察する。「ありじこく」では、京都を中心とする周

圏分布のコモコモ系に対して、他の各種の系統が各地で多元的に発生することを論ずる。比較されている「鶏の砂浴び」については、できれば分布に表わした補図もほしい。ミミッター系はたしかに「耳遠し」であろう。『中国地方五県言語地図』では三地点挙っているが、われわれの調査で出た分布・語形を補うと、岡山県邑久郡に集中分布があつて、ミミツタイ、ミミトー、ミミツペーなどの語形があつた。「もぐら」では、前田富祺氏の「もぐらの語史」をふまえる。それを「もぐらが土を掘る」の図をもとに、モツ、モルの動詞との関連を加えて、この語の語史を補強したところに本書の考察の深まりがある。意味を考える上で、モツ、モルの語のアクセントを問題としたことも方法上注目されるところである。次に「蝶・蛾・燕・菌・荷札」では、これらの語のカハヒラコ・ヒヒル・ツバヒラコ・クサビラ・ヒヒル等が同語源で、一つの語形に基づく、一元的発生のものであることを論証する。この項については巻末に図の掲出がないが、とくに「燕」については、『中国地方五県言語地図』に一部未調査部分があり、のち補われているので、補図として本書中にも掲げてほしかった。「燕と蝶と蛾の語史と方言」『現代方言学の課題』（第三巻）には、その増補図があるので参照いただきたい。

第八章「文献語と方言分布」の章では、とくに表題のごとく、文献と分布との照合に力が注がれている。「かまきり」では七一の文献による語史表が作られ、さらに、「かまきりと蝸牛」の分布比較、「関東地方のかまきりととかげの交錯」、「蛇と蝮の語史」がそれぞれ全国分布の中で解釈されている。

第九章の「渡来植物名の分布と解釈」は非常に特色のある章である。「南瓜」「馬鈴薯」「甘藷」「玉蜀黍」、これらの農作物は室町末から江戸初期にかけて、外国から渡来し、九州から各地に伝播したという、時代の新しさと伝播方向の特異性を持つ語類である。これらの名称を、甘藷は在来の里芋と、玉蜀黍については、古い時代の渡来物である黍や室町初期に渡来したらしい蜀黍とも比較して、辞書的な資料はもとより、近世の農書などをくわしく参看して、語史構成を行い、これらの物の伝播による語史が「方言圏論とは全く異なつた次元に属する」ことを明らかにした。また、関連する作物の調査なしには、「いかに玉蜀黍のこまかい分布を調査しても、その言語地図だけでは解釈は不可能であることは、中国地方の分布と名称を見れば明らかである。」と述べている。そのため、中国地方全県に補いの通信調査を実施し、「黍」「蜀黍」の全域図、鳥取岡山県境図、出雲周辺部を描き、また、「玉蜀黍」の増補図も掲げている。

第十章「山陰地方の開音語と解釈」は、山陰地方の、才段長音の開合の区別をとどめる $au \downarrow a:$ の分布を語源解のカギとする。「蜻蛉」ではその結果、山陰のトンバをもとに、トンボの語源を「飛棒」か、とする。この項に諸家の説が挙げられているが、本書刊行後、北条忠雄氏の「蜻蛉——その呼称と周縁論——」の発表が日本方言研究会（六一年十月、鹿児島大学）であつた。ほかに、「合歡木」の合歡 \downarrow カーカ、「陪堂」からのホイタ（ー）、「布・綿などのこげるにおい」のカガクサイ等と「蛸を防ぐための煙を出す道具」のカカーカ等がとも「ぼろ布」のカカフから出たとの考証や、「竹の皮で作つた笠」のタカノバチのタカウナ（筍）起源説、「母子草」のハハコ \downarrow ハウコ \downarrow ハーコ、などが論ぜられている。

第十一章「一音節語から多音節語へ」は、「隣接の分布・周辺の分布からの解釈と副題」、語の安定を求めるための多音節化した語形

について、『中国地方五県言語地図』にも現れた全国的な語、「蜘蛛のイ」「餌」^キ「よだれのツ」からの派生語について、分布連続を追って考察する。

第十二章「アクセントを中心とした茸の方言分布と解釈」では、語彙分布の解釈にアクセントをとり入れる新しい試みを提示する。

この方法は先にも触れたように、「もぐら」についてもその動詞「もぐら」が土を掘る」について、アクセントが問題にされていた。「茸」のタケの頭高型が、中国地方に、三類の尾高化の変化よりもあとに入ってきた、と推論する。

第十三章の「出雲アクセント名詞二音節語の四類・五類の尾高型の成立と中舌母音の発生」は、旧著「山陰地方のアクセント」(昭和二八年)の補強再説である。特に、中間地帯を重視して、出雲アクセントの成立過程を見ることに主眼が置かれる。イ列音、ウ列音の低下現象を考察のポイントとして、昭和五六年の新しい調査も加え、周辺に頭高型を残して、出雲アクセント地区にきわだって四・五類の尾高型への移行が起つたこと、京都アクセントから中国アクセントが生まれた時には出雲も同じ中国アクセントであったこと、中舌母音もそう古いものでないことを明快に論証する。東北地方の同じような条件の地域について、同様の論証ができるかどうか、それに伴って、出雲と東北との日本海沿いの連続性あるいは非連続性の考察がどう変わってくるか、今後大きな論議をよぶものと思われる。出雲アクセントに乙種系では異例の四・五類の区別が果してあるかどうかの問題提起も同様に重要である。

巻末の言語地図のまとめでの掲出は、各章で扱われた項目の要図で、大部分は『中国地方五県言語地図』からの、問題とされた語系

にしぼった描出である。問題部分にしぼられている関係もあるが、符号はよくコントラストが吟味され、鮮明な、読みとりやすい符号表現になっている。六九枚のうち、『日本語地図』の要約図八、他の研究者の図の引用五、著者の新作図十一枚が含まれる。

以上通観したように、中国地方の方言語彙の解明を全国視野とくわしい文献語史の中で行ない、個々の語史の解明にとどまらず、京都語と地方語とのかかわり方について、多くの法則性を発見したことは、言語地理学と国語史のために誠に大きな貢献といえよう。

このように『中国地方五県言語地図』の姉妹編として『方言語彙の研究』の大著が完成されたことは誠にめでたいことである。全国地方という広域を一人でまわり終えた超人的努力と、その資料を完全に生かすべく、膨大な文献資料を渉猟し、語史構成を完成した著者の初志貫徹は誠に貴く、著者の満足もさぞかしと思われる。本書にも記されているように、鳥の調査に正確を期すために、鳥の剥製を調査に持参したことか、地図完成後の京都に在任十一年間を、資料の多い京都という条件をフルに活用して文献調査に専念されたことなど、著者の厳密・入念な研究姿勢がうかがわれて、感銘深く読んだ。

四

おわりに私の個人的な体験と、本書の今後の活用についての私見を述べたいと思う。

まず、私事にわたり恐縮であるが、『中国地方五県言語地図』との個人的なかわりについて、ふりかえってみたい。私が岡山大学に赴任して、中国地方の方言調査に携るようになったのは、まさにこの地図が公刊されたすぐ翌年の昭和四一年であった。見事に描き出

された四百地点、四四〇枚の地図に目を見はった。この地図は中国地方五県の内部に限定した図集であるから、アクトセントなどの大境界になつてゐる兵庫県境への分布連続がどうなつてゐるかに最も興味を喚起され、その関心はその後ずつと持ち続けることになつた。

私の兵庫岡山県境調査はこの地図集がなかつたら、あるいははじめていなかったかもしれない。まことに私の調査の生みの親であつたと感謝してゐる。岡山大学在任の二十年にわたつて県境調査を継続したが、この地図集は指針として、予想語形の検索書としてたえず活用させてもらつた。ついにページがはがれるまでぼろぼろになり、もう一冊買い直しをした。辞書はともかく、専門書で痛んで買い直したという体験はこの本だけである。残念なのは、私と指導した方言研究海やま会が『兵庫岡山県境言語地図』をまとめ終つたのが、ちようどこの『方言語彙の研究』の刊行と同年になつたことである。著者の論考にはこれまでも多く学んできたが、このような法則性にとに章をたてて、まとめ直した一冊の本として、一冊の有機的統一のもとに読み吸収する機会を得ないままに地図をまとめることになつたからである。したがつて文献語史の吸収や関連項目の整備などをより十分著者から学ぶことは、私自身さらに今後の課題となつた。本書もまた、再読に再読を重ねることになると思う。

さて、本書の今後の活用について展望したい。すでに先にも述べたように、本書は『中国地方五県言語地図』の解釈から出発して、中国地方の地域研究であることを超え、全日本語の語彙史研究書になつてゐる。しかも方言調査の実体験を踏まえた、調査者自身による語史構成である。そのような「方言調査から語史説明まで」の全過程を示した、いわば完全研究のモデルとして、全国どの地域を言

語地理学的に調査・研究する者にとつても、必読の書となることは疑いがない。本書の検討を経ずして、今後の言語地理学も語彙史研究もあり得ないといつても過言ではないと思う。もちろん、本書に示された分布解釈や文献調査については、さらに広げ、深められるべきところはあるであらう。資料と解釈論は多ければ多いほど前進がある。方言分布については、中国五県の連続地域の資料増強がとくに期待される。岡山兵庫県境については私もある程度資料を作つたが、そのほかには、まず第一には山陰方言の濃い連続としての但馬である。次いで、瀬戸内海の諸島である。『瀬戸内海言語図巻』と重なる項目もあるが、連続未確認の項目も多い。九州とのつながりも『中国地方五県言語地図』項目によつて、くわしく見たい。また、中国地方内部においても、著者が、「玉蜀黍」から「黍」「蜀黍」を問題として考察を広げたように、関連項目の調査が各種の項目について拡充されることが望まれる。『中国地方五県言語地図』をもとにした、小地区全集落調査が各地で促進されるべきことも、もちろんである。これらは、主にこれからの新進の研究者に期待されることであるが、このような先達の役を果された著者自身、本書に収められた研究論考の原型が最近の昭和五十年代に次々とまとめられたものであることや、昭和六〇年にも『言語地理学から見た日本人と日本語』の好論（『応用言語学講座』第三巻）があることなど、現役の第一線として活躍を続けておられることは誠に心づよいことである。著者のいよいよのご健康をお祈りしたい。

（昭和六十一年二月二十八日発行 風間書房刊 A5判 六〇三ページ 一七〇〇〇円）
——三重大学教授——

（昭和六十一年十一月二十八日 受理）